

片桐洋一（かたぎり・よういち）　【編集委員】
1931年生まれ。京都大学大学院博士課程単位取得。大阪女子大学名誉教授。主要著書『伊勢物語の研究［研究篇］［資料篇］』（明治書院）『伊勢物語の新研究』（明治書院）『源氏物語以前』（笠間書院）

山本登朗（やまもと・とくろう）　【編集委員】
1949年生まれ。京都大学大学院博士課程単位取得。関西大学教授。主要著書『伊勢物語論　文体・主題・享受』（笠間書院）『日本漢詩人選集・菅原道真』（共著・研文出版）『平安文学研究ハンドブック』（共編・和泉書院）

鈴木隆司（すずき・たかし）
1970年生まれ。京都大学大学院博士後期課程修了。高知大学准教授。主要論文「在中将集の性質と成立（上）（下）」（『国語国文』67 2,3）「伊勢物語享受の一側面 -新古今集・新勅撰集の伊勢物語歌－」（『国語国文』70-7）

日下幸男（くさか・ゆきお）
1949年生まれ。大阪府立大学大学院博士後期課程修了。龍谷大学教授。主要著書『細川幽斎聞書』（和泉書院）『近世古今伝授史の研究地下篇』（新典社）『歌論歌学集成』第14巻（共著・三弥井書店）『中世近世和歌文芸論集』（編著・思文閣出版）

大口裕子（おおぐち・ひろこ）
1976年生まれ。早稲田大学大学院博士課程単位取得。霞会館資料展示委員会学芸員。主要論文「伊勢物語絵百十九段と能〈松風〉－「形見こそ」の和歌を中心に－」（『美術史』160号）

伊勢物語古注釈大成（いせものがたりこちゅうしゃくたいせい）　第三巻

2008年（平成20）9月30日　初版第1刷発行©

片桐洋一・山本登朗　責任編集

装幀　右澤康之
発行者　池田つや子
発行所　有限会社笠間書院
〒 101 0064　東京都千代田区猿楽町 2-2-3
☎ 03-3295-1331㈹　FAX03-3294-0996
NDC 分類 913.32　振替00110-1-56002

ISBN4-305-70043 8 C3395　藤原印刷・渡辺製本
乱丁・落丁本はお取りかえいたします。　（本文用紙：中性紙使用）
http://www.kasamashoin.co.jp

はかすかのとかきかへたる許也。ことなる子細なしと云々。わか草のつまは、草のもえいてたるはしを、つまといへり。これによりて、人の妻によせて、わかくさのつまとつゝけたり。萩を鹿の花妻といふは、しかの萩をはすさめてくふ物なれは、愛する心に又つまといへり。又此歌のつまは男をいへり。男をもつまといふへき事、其証おほし。『顕注密勘』なとにしるせり。

十三

十三、むさしあふみさすかにかけてたのむにはとはぬもつらしとふもうるさし

むまのくらにかくるあふみ、むさしの国よりいたす物也。さす・かくるなとは、あふみのゑんのことは也。とへはいふとはねはうらむむさしあふみかゝるおりにや人はしぬらん

歌の心は、とへはとふとていふ、又とはねはとはぬとてうらむ、かゝるおりに人は思わつらひてしぬる物、とよめる也。

十四

十四、中々にこひにしなすはくはこにそなるへかりける玉のをはかり

これは、『万葉』十三の歌也。桑子は、かいこをいへり。歌の心は、恋をしてしなれすしてひさしく物をおもはんよりは、かいこになりてしはしはかりありてしなはや、とよめる也。玉のをはかりは、しはしといふ心也。『古今』歌、

しぬるいのちいきもやすると心みに玉のをはかりあはんといはなん

かい子は一年のうちにしぬるむしなれは、かくいへり。うたさへそひなひたりける。

ひなは、ゐ中をいふ。桑子はいなかにかふ物なれは、みなるゝまゝに歌にもよめる也。

夜もあけはきつにはめなてくたかけのまたきに鳴てせなをやりつる

きつは、狐也。はめは、食の字也。きつねにくはする心也。くたかけは、庭鳥の名也。鶏といふ字をかけとはよめり。それにくたといふ詞をそへたるは、ちいさきをくたといへは、ちいさき庭鳥也。またきは、速の字也。はやき心也。せなは、夫也。庭鳥かはやくなきておとこをかへしつとうらむる也。

くりはら(くはゝ)のあれ(あぬゝ)はの松の人ならは都のつとにいさといはましを

くりはら、一本にくわはらとかけり。あれは、一本にあねはとあり。奥州の所の名也。『古今集』第廿東歌に、

おくろさきみつのこしまの人ならは都のつとにいさといはましを

とあり。第一第二の句のかはれるはかり也。『古今』の歌は、みつのこしまかおもしろき所にてあるほとに、そこの人ならは都へさそひてのほらん、とよめり。此歌は、松か人にてあらはさそはん、とよめり。いさゝかその心かはれり。つとは裹也。都のみやけにつゝむ土産をつとゝいへは、それによせていへるなるへし。

よろこほひて、おもひけらし、とそいひおりける。

よろこほひは、よろこひて也。都へつれていかはやといへるを、女の心によろこへる也。

十五

十五、なてうことなき人のめにかよひけるに、無何条事也。なにほとの事もなきといふ事也。あしからす、よからぬ人をいふ。この詞は、『源氏』のあつまやの巻にもあり。

あやしう、さやうにてあるへきをんなともあらすみえけれは、

しゝうかよはすへき女ともおほえぬを、あやしくおもひて、その心をしらまほしく思て、歌をよみてやれる也。

しのふ山しのひてかよふ道もかな人の心のおくもみるへく

忍山は奥州にあり。さて人の心をおくとそへたり。此歌は、『新勅撰集』に入たり。

さるさかなきえひす心をみては、いかゝはせん。

さかなきは、不祥とも悪ともかきて、さかなしとよめり。わろき心也。えひすは、みちの国の人なれは、えひす心といへり。又えひすといふは、西宮にましますひる子の神をえひす三郎といへり。その神はいさゝかの物にても心かかたふきやすき神なれは、それをえひす心とも